

明治ソンズが

リーツン

滋賀大学彦根キャンパス総合研究棟〈士魂商才館〉1 階 しがだい資料展示コーナー

#### ▶第1期 明治25年の彦根(I)

- 玄宮楽々園、彦根城、レンゲソウ畑、芹川での競馬、馬芝居 会期 2018 年 10 月 2 日 (火) ~ 11 月 30 日 (金)

**第2期 明治25年の彦根(II) ―天寧寺、十六羅漢像、ササユリ**会期2018年12月4日(火)~2019年1月31日(木)

第3期 明治25年の米原と長浜 —曳山祭、青岸寺、旅芝居の座長 会期2019年2月4日(月)~3月29日(金)



編集·発行:滋賀大学経済経営研究所

**∓522-8522** 

2018年10月2日発行

# 英国人画家 パーソンズが描いた 明治中期の 彦根・米原・長浜

イギリス人水彩画家アルフレッド・パーソンズ Alfred Parsons(1847 – 1920)は、1892年(明治25年)に来日し、早春から晩秋にかけて日本各地を旅行しながら、日本の植物と風景を組み合わせた水彩画を数多く描いた。パーソンズは、のちに英国オールド・ウォーターカラー・ソサエティの会長を務めることになる画家であり、また庭園の設計家としても活躍した人物である。さらに、彼は、日本の美術界にとって、明治中期以降、三宅克己、大下藤次郎、丸山晩霞を初めとする日本の水彩画家たちに大きな影響を与えた点でも忘れることのできない芸術家である。

パーソンズは、明治 25 年の 5 月 19 日から約 1 か月間、彦根に滞在した。5 月末まで楽々園・地震の間に宿泊し、城山に登ったり玄宮園を描いたり、また、芹川で行われていた競馬や、街中で興行されていた馬芝居を見物している。その後、6 月 19 日まで天寧寺にホームステイして、境内や裏山で出遭ったツツジやササユリ、ノイバラなどの植物、寺から眺めた琵琶湖の夕景色などを描き、寺の家族とも親しく交流した。

秋には、米原に宿をとって青岸寺の庭を描いたり、 長浜まで出かけて曳山祭を見物し、祭りの様子を詳 細に記録している。

帰国後に発表した日本紀行文 Notes in Japan (単行本、1896年刊)において、パーソンズは、彦根・ 米原・長浜のその当時の景観、そして人々の暮らし などを、写実的な水彩画・スケッチと細やかな文章と で生き生きと描写している。

本展示では、明治中期における上記の3つの町の風景、植生、人々の生活ぶりなどを、Notes in Japanに多数収録されているパーソンズの精妙な画、また彼が綴った克明な文章、その他の関連資料によって紹介する。

展示は、以下のとおり、3期に分けて行う。

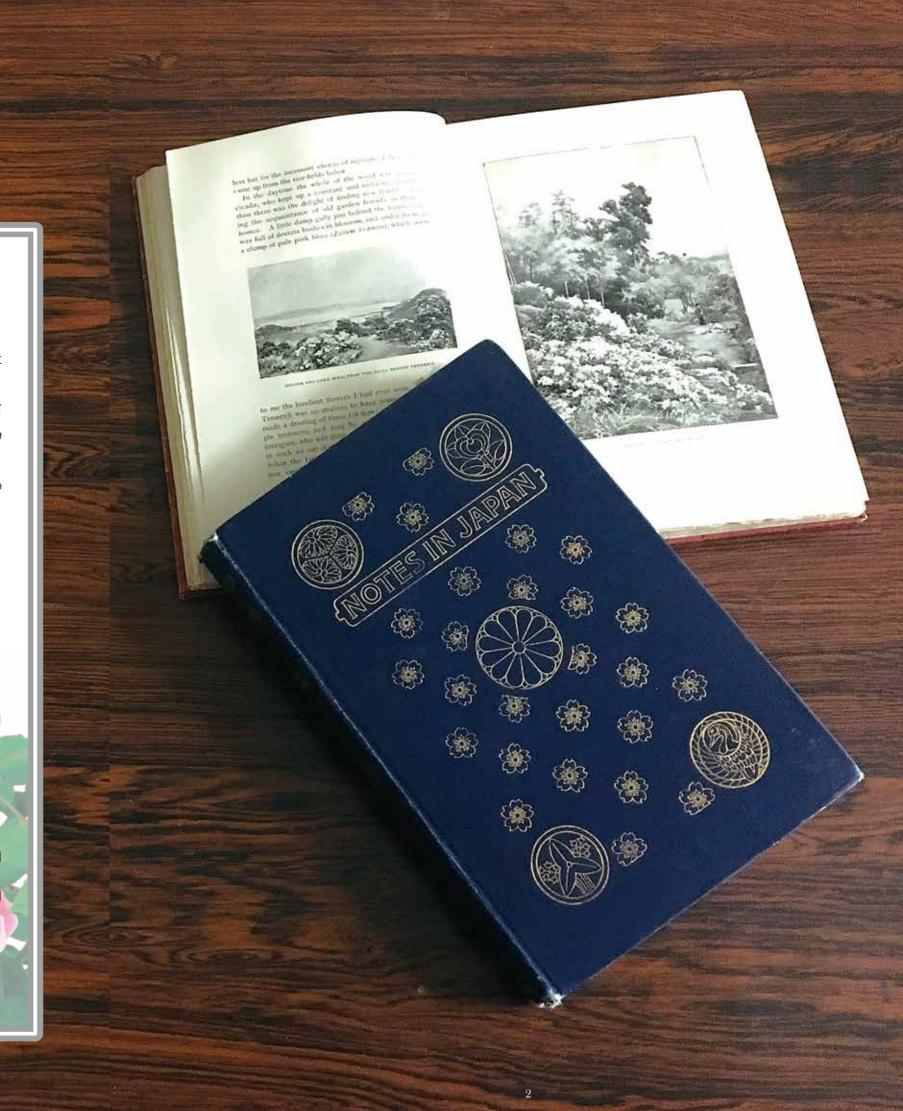
第1期:「明治25年の彦根(I)—玄宮楽々園、 彦根城、レンゲソウ畑、芹川での競馬、馬芝居」 第2期:「明治25年の彦根(II)—天寧寺、 十六羅漢像、ササユリ」

第3期:「明治25年の米原と長浜一曳山祭、青岸寺、旅芝居の座長」

2018年10月

監修:金子孝吉(カネコタカヨシ) 滋賀大学経済学部教授(文化システム論・文学) 関係文献:

金子孝吉「アルフレッド・パーソンズと彦根天寧寺 (1)」 『彦根論叢』第 367号 滋賀大学経済学会,2007. 金子孝吉「アルフレッド・パーソンズと彦根天寧寺 (2)」 『彦根論叢』第 368号 滋賀大学経済学会,2007.



### アルフレッド・パーソンズ 略年譜

1847年12月2日	イギリス西部サマセット州ベッキントンで、外 科医の父のもとに 14 人兄弟姉妹の第二 子として生まれる。
1865年(18歳)	ロンドンに出て、郵便局に勤務しながら、 サウスケンジントン・スクール(美術学校) の夜学に通う。
1868年(21歳)	英国美術家協会展に初出品。
1871年(24歳)	ロイヤル・アカデミー展に初出品(1874 年以降、亡〈なるまで毎年出品)。
1882年(35歳)	ニュー・ウォーターカラー・ソサエティの正会 員になる。
1884 年(37 歳)	ウスターシャー州ブロードウェイに、 アメリカ人 画家ジョン・S・サージェント、 E・A アビィ、 F・D・ミレット、 アメリカ人小説家へンリー・ ジェイムズ、 文芸批評家エドモンド・ゴスら とともに芸術家コロニーを築く。
1885年 (38歳)	画廊ファイン・アート・ソサエティで個展を 開く。
1887年(40歳)	ロイヤル・アカデミー展に出品した作品「花 笑い鳥歌うとき」が国家買い上げ作品に選 ばれる (パーソンズの代表作の一枚となる)。
1891年(44歳)	画廊ファイン・アート・ソサエティで個展を開催。 アメリカの雑誌『ハーパーズ・ニュー・マンスリー・マガジン』に挿絵を寄せる。 画家 F・D・ミレット、P・ビゲローとともに、ドナウ河を旅する(このときの紀行文がミレット著『ドナウ河紀行』として、1893 年にアメリカのハーパー社から出版される。パーソンズは、ミレットとともに挿絵を担当)。
1892年(45歳)	3 月~ 12 月にかけて日本各地を旅行。 初夏に約 1ヶ月、彦根に滞在する。初 めは楽々園に宿泊し、のちに天寧寺に移 る。天寧寺では、住職の高木宗欣、妻・ おしげ、息子・喜三郎と親しく交流する。 秋には米原に宿泊し、長浜の曳山祭を見 物したり、青岸寺の庭園を描いている。 11 月下旬にパーソンズの滞日作品展が東

京美術学校で開催される。のちに日本を

代表する水彩画家となる三宅克己がこの 展覧会を見て、多大な影響を受ける。



1893 年(46 歳)	ロイヤル・アカデミー展に作品「天寧寺の石仏たち」を出品。 画廊ファイン・アート・ソサエティで、滞日作品展「日本の風景と花の水彩画展」を開催する。
1894年(47歳)	雑誌『ハーパーズ・ニュー・マンスリー・マガジン』に、この年の6月から翌年の5月にかけて、6回に分けて日本紀行文Notes in Japan を発表。
1895年(48歳)	W・パートリッジ、C・タドウェイと共同で、 庭園デザインの仕事に取り組み始める。
1896年(49歳)	アメリカのハーパー社から、単行本 Notes in Japan が出版される。
1897年(50歳)	ロイヤル・アカデミー準会員に選出される。
1898年(51歳)	ロンドンのパーソンズ宅を三宅克己が訪問。
1903年 (56歳)	水彩画家・大下藤次郎の訪問を受ける。
1905年 (58歳)	オールド・ウォーターカラー・ソサエティ正会 員に選出される。
1910年(63歳)	著名な園芸家エレン・ウィルモットのバラ図 譜 Genua Rosa(バラ属)の出版が始まる(パーソンズは同著内のすべてのバラの絵を担当)。
1911年(64歳)	ロイヤル・アカデミー正会員に選出される。

(谷田博幸「画家パーソンズが日本にみようとしたもの」、『100 年前に描かれた彦根一イギリス人水彩画家アルフレッド・パーソンズの話』彦根景観フォーラム, 2007をもとに作成)

1914年(67歳) オールド・ウォーターカラー・ソサエティ会長 に就任する。

1920年(72歳) 1月16日、イギリスのウスターシャー州ブ ロードウェイで死去。

天寧寺の高木喜三郎と書簡を交わす。

1912年(65歳)



## パーソンズの 日本旅行の足取り

1892年(明治25年)

- 3月9日、長崎港に到着。その後、瀬戸内海を船で航行。
- 3月半ばから、神戸に滞在(神戸クラブ)。
- 4月13日から、奈良に滞在(宿泊先:菊水屋)。
- 4月25日、吉野へ桜を描きに行く(宿泊先:たつみや)。
- 5月4日、初瀬へ(長谷寺で牡丹の絵を描く)。
- 5月9日、奈良へ戻る(宿泊先:菊水屋)。
- 5月19日、奈良を発ち、宇治を経由して、彦根に夕方到着(宿 泊先:楽々亭)。
- 5月末、宿泊先を天寧寺に移す。
- 6月18日、パスポート更新のため、彦根を去り、神戸へ戻る。
- 6月末、名古屋を経由して、鎌倉へ。
- 7月9日、横浜を発ち、宇都宮を経由して日光へ行く。
- 8月初旬、富士山に登頂する。
- 9月初旬、富士吉田へ。甲府、諏訪を訪れ、中山道を通っ て妻籠へ向かう。その後、山越えして飯田へ。
- 9月16日、浜松に到着。
- 9月下旬、神戸に戻る。須磨、明石、有馬を訪ねる。
- 10月6日、神戸を発ち、米原へ。
- 10月半ば、長浜へ数日間通って曳山祭を見物。
- 10月下旬、静岡から久能山、清水、熱海周辺を旅行。
- 11月初旬、横浜に滞在。箱根を訪ねる。
- 11 月下旬、上野の東京美術学校(現・東京芸術大学)で 滞日作品展を開催。
- 12月10日、横浜港から日本を出国。



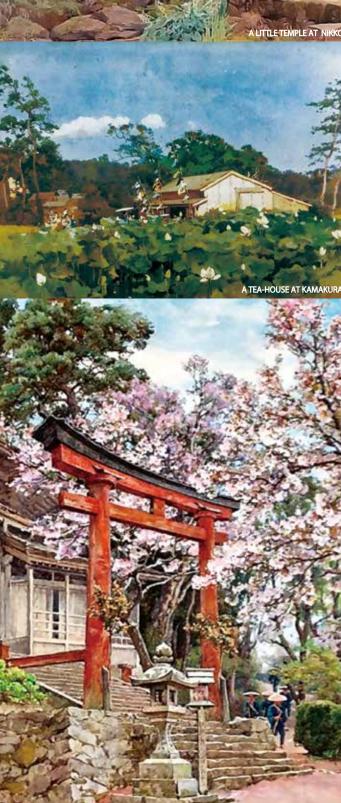


illustration : Alfred Parsons

## 第1期: 明治25年の彦根(I)

一玄宮楽々園 彦根城 レンゲソウ畑 芹川での競馬 馬芝居

I reached Hikone by rail the same evening, and took up my quarters at the Raku-raku-tei tea-house, a great rambling place, with a large garden and suites of rooms to suit all tastes. I was shown into a gorgeous apartment with gold screens, its floor raised above the level of the rest of the house, which no doubt was intended for great people, who in the old days must often have come here to see the Daimio, Ii Kamon no Kami; but I felt I could not live up to this, and after viewing the rooms overlookig the lake, and those built on piles over the fish-pond, I selected some that looked out into the garden, with a trellis of wistaria just in front under which the purple trails of blossom nearly a yard long were still hanging. There are no crowds of visitors now, and the fine old garden looks



rather tangled and neglected, with bushes untrimmed and

The first lotus leaves were just coming up in the ponds and the irises blossoming round the water's edge, the azalea bushes were coverd with flowers, and the tips of the pale green maple boughs were tinged with rosy pink. When the pouring rain had begun to drip through my sketching umbrella, and I was driven in-doors, there was no lack of society. O Kazu San, a plain little thing with brown velvet eyes, and the rest of the girls were never tired of looking at my belongings, thumbing my sketch-books, and asking me endless questions;……

#### 1. 玄宮楽々園 — パーソンズ、「楽々亭」 に宿泊し、玄宮園を描く

原屋の池では、スの最初の葉が出ばしば、パナシー原屋の池では、バスの最初の葉が出ばしば、パナシーが池の縁で咲きだしていた。ツツジの繁みは花でかまた、私は屋内に戻らざるをえない。だが、そんなと、私は屋内に戻らざるをえない。だが、そんなと、私は屋内に戻らざるをえない。だが、そんなときにはいつも、宿の仲居さんたちとの賑やかな更と、私は屋内に戻らざるをえない。だが、そんなりが始まるのだった。褐色のビロードの眼をもつらいが始まるのだった。褐色のビロードの眼をもつらいが始まるのだった。褐色のビロードの眼をもつらいが始まるのだった。褐色のビロードの眼をもつらいが出している。

いう御茶屋(Raku-raku-tei tea-house)にとった。 々亭は広々としていて、大きな庭園があり、いろ 々亭は広々としていて、大きな庭園があり、いろ な夢は広々としていて、大きな庭園があり、いろ な夢は広々としていて、大きな庭園があり、いろ な夢は広々としていて、大きな庭園があり、いろ な夢は広々としていて、大きな庭園があり、いろ な夢は広々としていて、大きな庭園があり、いろ な夢は広々としていて、大きな庭園があり、いろ な夢には、宿の他の部屋より一段高くなっていた。こ 床は、宿の他の部屋より一段高くなっていた。こ 床は、宿の他の部屋より一段高くなっていた。こ 床は、宿の他の部屋より一段高くなっていた。こ 原画が高位の人々のために造られた部屋であるのは間 いない。彼らは昔時、大名である井伊掃部頭 いない。彼らは昔時、大名である井伊掃部頭 いない。彼らは昔時、大名である井伊掃部頭 な調画した部屋を選 案内されたあと、結局、庭園に面した部屋を選 を眺めることができたからである。棚には、藤の POND IN THE GARDEN OF RAKU-RAKU-TEI, HIKONE (彦根、楽々亭の庭園にある池)
5月下旬に池の中で観察された出はじめのハスの葉、池の縁で淡紫色の花を咲かせ

(多校、栄々学の庭園にある池)
5月下旬に池の中で観察された出はじめのハスの葉、池の縁で淡紫色の花を咲かせているハナショウブ、黄色い小さな花をつけたコウホネなどが描かれている。モミジの若葉(特に枝の先端部分についている葉)が淡い黄緑色になっているが、モミ

ジの若葉が出はじめたとき、実際、その色は緑ではなく、淡い黄緑色をしている。 パーソンズは「モミジの新枝の先端は淡紅色に染まっていた」とも綴っている。モ ミジが春になって新たに枝を伸ばしたとき、その出たばかりの若枝の色は赤いので、 彼の観察が細かなところまで行き届いていることが分かる。



OKAZUSAN (おかずさん) 楽々亭の仲居を務めていた 少女を描いたスケッチ。 おかずさんとはパーソンズ は特に親しくなり、彼女は 芹川の競馬を一緒に見に 行ったり、秋には米原でパー ソンズと再会してもいる。



ポストカード:彦根楽々園ノ書院(レプリカ)

パーソンズが泊まった「庭園に面した部屋」、そこから「ちょうど正面に藤棚を眺めることができた」部屋とは、「地震の間」と呼ばれる部屋であると推察される。

現在、楽々園に「藤棚」はないが、楽々園を撮影した古い絵 葉書に、地震の間から見てほぼ正面方向、少し離れた場所で はあるが、藤棚が写っているのが確認される(上図の赤丸部分)。



WHITE AZALEA BUSH, RAKU-RAKU-TEI, HIKONE (彦根、楽々亭、白いツツジの繁み)

楽々園と玄宮園との境付近にある石組のあいだに 生えている白いツツジを描いたもの。明治 25 年当 時、「楽々亭」の庭には今より多くのツツジが植栽 されていたようである。

illustration: Alfred Parsons, Notes in Japan, New York: Harper & Brothers Publishers, 1896.



Alfred Parsons, *Notes in Japan*, New York: Harper & Brothers Publishers, 1896. パーソンズによる彦根城のスケッチは、当時販売されていた絵葉書に基づいて描かれている(次頁のポストカードを参照)。

On a steep rocky hill close by is the castle where the Daimio formerly lived; the hill is on one side protected by the lake, and on the others by a wide moat, crossed by picturesque wooden bridges, and the roads which lead to the plateau at the top are defended by more bridges over dry moats, gate-houses, and zigzag walls of large, well-fitted stones. .....

In the short period after the introduction of Western ideas, when the craze for things European led to many acts of vandalism, most of them were pulled down, and this one at

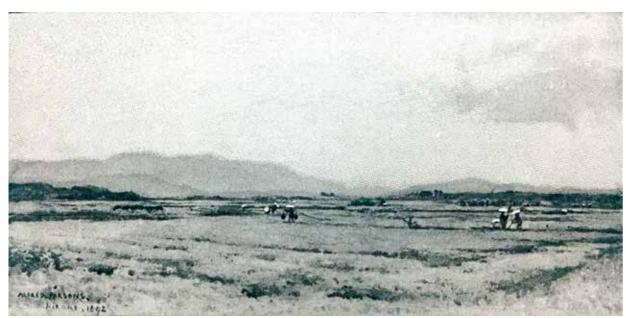
 $\label{thm:constraints} \mbox{Hikone was only just saved from destruction by the intervention of the Emperor; \dots ... \label{thm:constraints}$ 

The moats, overhung with pines and filled with lotus during the summer months, are always interesting. It was a blazing hot day when I walked up and examined the castle; there was not a cloud in the sky, and Lake Biwa and its mountains lay still and clear and soft in the delicate blue haze which seems to be their own peculiar property......

#### 2. 彦根城 — パーソンズ、城山に登る

、件の大名が以前住まっていた城がある。城山の一方の側は湖によって、残りる。城山の一方の側は湖によって、残りる。城山の一方の側は湖によって、残りる。城山の一方の側は湖によって、残りる。城山の一方の側は広い濠によって護られていた。濠には絵のように美しい木の橋が何本か渡さは絵のように美しい木の橋が何本か渡さは絵のように美しい木の橋が何本か渡されており、頂上の天守広場まで通じている数本の道は、空濠の上に架けられたもっる数本の道は、空濠の上に架けられたもっる数本の道は、空濠の上に架けられたもっる数本の道は、空濠の上に架けられたもったが、彦根のこの城だけよ、天皇のおれた。 等限のこの城だけよ、天皇のおれた。 等限のこの城だけよ、天皇のおれた。 等限のこの城だけよ、天皇のおれた。 等限のこの城だけよ、天皇のおれた。 等限のこの城だけよ、天皇のおれた。 等限のこの城だけよ、天皇のおれた。 等限のこの城だけよ、天皇のおれた。 第1250年





FIELDS NEAR LAKE BIWA (琵琶湖近くの田圃)

The fields outside the town were covered with a bright pink flower like a clover, which is not used for fodder, as there are hardly any animals to feed, but is dug in to improve the land for the rice, and this blaze of color consoled me for not finding as many azaleas as I expected. I set to work at a study of it,.....

#### 3. レンゲソウ畑――パーソンズ、郊外に赴く

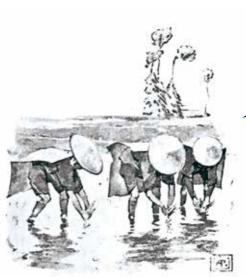
往の対外に広がる田圃は一様の対外に広がる田圃は一面、明るい薄紅色の花によって面、明るい薄紅色の花によって面、明るい薄紅色の花によって直がれているようだ。この植物は、家畜の飼料用ではなく(ここに家畜の飼料用ではなく(ここにな動物はほとんどいない)、稲かに栽培されているのである、この燃えたつような色のである、この地で、期待していたほどたくさんのツツジの花を見いだせずくさんのツツジの花を見いだせずくさんのツツジの花を見いだせずくさんのツッジの花を見いだせずくさんのツッジの花を見いだせずくさんのツッジの花を見いだせずくさんのツッジの花を見いだせずくさんのツッジの花を見いだせずくさんのである。

#### 彦根の郊外で、以前よく見られたレンゲソウ畑

マメ科の植物であるレンゲソウ(ゲンゲ)は、その根に共生している根粒菌の働きによって、空気中にある窒素を葉や茎に取り込めることから、良質な肥料となる緑肥植物として、明治以降長きに渡り、日本各地の田圃で栽培されてきた。農家の人々は、前年の秋に田圃にレンゲソウの種を播き、春になってレンゲソウがよく育ち、花が満開になっているときに、レンゲソウをまるごと土の中に鋤き込んで、稲作のための大事な肥料としたのである。県内でも湖東は特にレンゲソウ栽培が盛んな地域だったが、化学肥料が普及したことや田植えの時期が早期化したことなどによって、近年では、彦根周辺で、春に田圃が一面レンゲソウの紅紫色の艶やかな花で埋め尽くされる風景はほとんど見られなくなっている。



jizake\_hashimotoya (撮影 2018-5-17) [online] https://www.instagram.com/jizake\_hashimotoya/(参照 2018-7-26)



PLANTING RICE(田植え風景)

対が 管笠を被って田植えをしている三人の背を覆っているのは、着ゴザ。 イグサなどで編んだゴザに、油や柿渋を塗った紙を張り合わせて作ら れる軽便雨具である(トイ、キゴモ、テシマなど、土地によって様々 な呼び方がある)。

パーソンズは、「雨が強く降っていた。……人々は田植えをするのに大忙しで、田圃には大勢の男女が脛の半分まで泥水につかって働いている。彼らは雨水を防ぐために、笠("kasa")や蓑(straw coats)、油の塗られた紙(oiled paper)、ゴザ(rush mats)、その他の考案品を身に着けていた」と書いている。

着ゴザは、人の背中部分しか覆うことができないが、ほとんど前かが みになって作業をおこなう田植え時には十分役目を果たしていた。な お、着ゴザは夏の日差しを防ぐ日除けとしても用いられる。



PREPARING THE RICE-FIELDS (田植えの準備)

笠と蓑を身に着けた農夫が、水が張られた田圃の中で、牛に馬鍬を牽引させて代掻きをしている。この図では、牛の背の、鞍が通常取り付けられているところに、さらに山型の藁葺き屋根が掛けられているのが眼をひく。

パーソンズは、「一頭の牛が、その背中の上に、雨水をはじくための小さな藁葺きの屋根を載せ、泥の中で鍬を引いている」と記している。この「藁葺きの屋根」は「牛養」と呼ばれるものである。

10

illustration: Alfred Parsons, Notes in Japan, New York: Harper & Brothers Publishers, 1896.

He came back early in the afternoon to tell me that  $\cdots$  there were some races going on in the town, so we wandered up, and established ourselves in a room just over the starting-post. The course was about two hundred and fifty yards along the pebbly bed of a dry river, and all the arrangements were very unlike those of a European racecourse. Two upright posts of bamboo stood about five yards apart, with a stout pole slung between them: the vicious little ponies were brought along by two grooms, each holding a long cord fastened to the bridle, and with a good deal of shoving and hustling were wedged in, shoulder to shoulder, between this pole and another behind them at about the height of their hocks. Their heads were pulled over the front pole, and held firmly by a groom with a long running cord though the bridle rings, while the jockeys were fully occupied in preventing the little brutes from striking each other with their fore and hind legs. Meanwhile the spectators, who had kept at a respectful distance until the ponies were safely fixed, crowded up behind them, pulling their tails and whacking them with bamboos. The starter then

appeared, made a few remarks, and beat a small drum, upon which the men in charge of the pulleys dropped the front pole, the grooms slipped their ropes out of the bridle rings and jumped aside, and the ponies scrambled off as best they could. The jockeys rode without saddles or stirrups, with their great toes hitched into a surcingle, and directly they were off they dropped the reins, held their left hands in the air, and plied their whips with the right until they had passed the winning-post. It was just a scurry, with no time for scientific riding, and, as far as I could see, the pony who got over the pole best always won. O Kazu San, my waitress at the Raku-raku-tei, was helping at the tea-house, and kept me supplied with tea and cakes, and I stayed watching the races and the spectators, and being watches by them, until the dusk put a stop to sport. I left too soon, for my boy told me that there was a fight afterwards about a bet; it was the only fight I heard of while I was Japan, and I should have liked to see it. Two days of heavy rain turned the course into a river once more, so that the heats were

#### 4. 芹川での競馬 — パーソンズ、日本の草競馬を見に行く

た長い縄紐を握っていた。

馬の脚の膝あたりの高

よって連れてこられた。

二人は、

馬勒に結ばれ

11

のようだった。 身体を蹴り合わないようにさせるだけで精一 もっぱら、 馬丁がしつかりと握って、 の棒の上を越えてはみ出していたが、 よう制御していた。 中に通されていた長い競馬用の縄紐を、 圧し合いを繰り返していた。 たちはぎゅうぎゅう詰めにされていた。 後ろにある棒とで区切られた狭い空間に、 さに吊るされていた、 列に並びながらも、 小さな獣たちが前脚と後脚で互いの 自分たちの前に吊るされていた丸太 さて、 見物人たちの方は、 馬たちの前にある棒と、 馬たちは互いに押し合い 馬たちの頭が動かない 騎手たちはといえば、 馬たちの頭は、 馬勒の輪の そこで、

の設備はどれをとっても、 およそ五ヤ 似ても似つかぬものだった。 床に沿って延びていて、 ぐ下に見おろすことができる茶屋の一室に席を 丸太の棒が滑車によって吊るされていた。 御しにくそうな小馬が数頭、 その杭と杭とをつなぐように、 -は○・九巴] ほどだった。 ドの間隔をあけて垂直に立てら 上がった小石だらけの河 そこで、 -スの出発標柱をす いま町中で競馬が ロッパのそれとは 二人の馬丁に ここの競馬場 一本の太い いかに 訳 お

すばやく丸太を落下 さっと脇の 馬勒の輪からするりと引き抜きなが 一 言二言、 方へ飛び退くと、 上を述べて、 馬丁は、 小馬たちは全速

Ino title Alfred Parsons, Notes in Japan New York; Harper & Brothers Publishers, 1896.



草競馬 撮影日=昭和32年11月18日 場所=八日市市沖野(現・東近江市沖野) 出典:『浅岡利三郎写真が語る昭和三十年代湖国暮らしの表情』、白川書院、2008.

この写真に付された解説文には、「コースが短いところでは、『出勝ち』といって、落とされた丸太を真っ先に飛び越えて出るかどうかで 着順が決まった」(112頁) とある。

12

けの時間などはなかった。

私が観察しえたかぎ

ル地点に達するまで馬に浴びせ続けた。

ここで

たまま、

右手で鞭を、ゴー

た手綱を落とし、

行われるレースはまったくの短距離走であり、

熟練した乗馬技術が成果を発するだ

騎手たちは、

自分たちの両足の親指を馬の腹帯の中に突つ

サドルも鐙もなしで馬に跨っていた

落馬するのを防いでいた。

なると、 自分の眼で見たかったと思っている。 た唯一の喧嘩だった。 を巡って喧嘩があったと教えてくれたからであ それは少々早すぎたかもしれない。 見に来ていた見物人たちとを眺めていた。と同 行できなくなるまで、 をやいてくれて、 楽々亭の仲居のおかずさんがなにかと私に世話 えた小馬が、いつも勝利を収めていた。 りの太さの丸太棒を最初にもっとも上手に飛び越 せる競馬レースが行われることはもうなかった。 水で埋まってしまった。 そのため、 仕してくれた。 を叩いたりしていた。 を打ち鳴らした。 集まってきて、 中に押し込まれ、 イの松葉が、そのあとレース場で賭けのこと 日没とともに私はレース場を立ち去ったが、 スタ 私の方も見物人たちによって眺められてい いざ、 ト地点で、 私が日本滞在中に聞くことができ トと同時に地面に落とされるかな 馬の尻尾を引っ張ったり、 夕闇が迫りレースがそれ以上続 馬たちがスター お茶とお菓子を絶えず私に給 棒を地面に落とす係の男たち 馬たちの後方に一斉に群が もはや暴れ出す恐れがない そうこうするうちに、 私は争いの様子をできれば 川の水嵩が増え、 私は、 馬たちの前に吊るされて レースと、それを 馬たちの前に吊る というのは、 翌日から二 茶屋では、 竹で馬 スタ

『日出新聞』(現・京都新聞) 明治 25 年 5 月 25 日 (水曜日) 付は、「彦根の大競馬会」の見出しで、同月 22 日 (日曜日)、23 日 (月曜日)の両日、芹川で競馬会が催されたことを次のように報じている。

去廿二廿三の両日江州彦根遊郭袋町下芹川筋礦に於て同地第二消防組の催ふしにて大競馬 会あり初日は朝来好天気にて見物人非常に多く馬場近傍は人の山を築きたり又翌廿三日は午 前より曇天にて午后一時競馬の初まらんとするときより微雨催ふしたる為め前日の如く賑はしか らざりしが両夜とも袋町青楼は平常より客足繁かりしよし

この記事に基づけば、パーソンズが芹川で催された競馬を見に行ったのは、初日の5月22日(日曜日)だったことになる。新聞によれば、この日は一日中天気がよく、たくさんの見物客が集まった。パーソンズの記述からは、日没まで競馬が行われ続けたこと、競馬が終わったあとで「賭け」を巡って喧嘩があったことが分かる。

それ以外にも、当日の競馬レースの様子が、パーソンズの細やかな観察に基づく報告文によって生き生きと描写されていて、明治中期に芹川の川床で行われていた草競馬の様子をよく伝える貴重な記録となっている。

こうした農耕用や運搬用の馬を河川敷等で走らせる草競馬は、芹川だけでなく、犬上川(高宮、広野)、  $\frac{1}{2}$  宇曽川や愛知川でも、昭和 20 年代終わり頃もしくは昭和 30 年代頃まで、大きな祝いごとなどがある際などによく行われていた。



『日出新聞』明治 25 年 5 月 25 日発行

13

芹川での競馬の様子(彦根市立図書館提供)

この写真は、「大正 15 年 (1926) の上芹橋竣工を 記念して、芹川の河川敷で行われた」ときに撮影 されたもの(『新修彦根市史第 10 巻景観編』、彦 根市、2011、246 頁参照)。



芹川での競馬の様子(彦根市立図書館提供)



14

犬上川(高宮)で行われた競馬 〈彦根市・昭和 27 年頃〉 『写真アルバム 彦根・犬上・愛知の昭和』, いき 出版, 2012.



二代目片山竹五郎一座による娘大曲馬のチラシ(明治後期)。出典:国立民族学博物館『[特別展]見世物大博覧会カタログ』, 2016.

Some few days after, Matsuba told me that there was a combats; the swords and other necessary properties were "Japanese man's circus" in the town. It was not in the least like a circus; it was a theatrical performance in which all the members of the company, who in this troupe were women, were mounted on horseback. There was a small stage, with a set scene at the back, and in front of it, on the same level as the spectators, a space of bare earth on which the action took place. The play consisted mostly of

brought in by attendants, and placed on a high stand where they could be easily reached by the actors, and the horses were then led into position, and held there while the fighting went on. None of the performers fell off, but beyond this there was no horsemanship; they could not even get their steeds on and off the stage without the help

松葉が私に、

#### 5. 馬芝居 —— パーソンズ、日本人サーカスを見物する

な舞台が設けられていて、 たちは誰ひとり その位置にじっと立っていた。 たちがそれぞれの定位置に連れてこられ、 ちの手が容易に届くようにしてあった。 場に運び込まれ、 は戦闘シーンからなっていた。 芝居が演じられるのである。 書き割りが置かれていた。 まりは観客の眼と同じ高さのところで、 ーマンスとでも言うべきもので、 んとした馬術を身に付け ンが続いているあいだ、 剥き出しになっている地面の上で、 彦根の町中のある場所に、 台上にある武具類は、 なぜなら、 落馬することはなかった。 それも、 座の雑用方らによって会 馬に乗って芝居を演じる つの高い台の上に並べ の助けがなけ 馬芝居を演じて その舞台の前の 舞台の後方には ここでは全員が 演技する女性 芝居の大部分 この女性たち 刀剣や他の戦 馬たちは 演者た 小さ

阿久根巌『サーカス誕生 曲馬団物語』(ありな書房、1988) によれば、「在来の日本曲馬は、曲乗りも演じてはいたが、 歌舞伎の趣向を取り入れた、馬芝居=曲馬芝居が主演目で あり、西洋の曲馬とは芸質の違うもの」(10頁)だった。また、 「馬芝居の役者は、みな娘達」である場合もあり、「すべて 馬に乗って芝居を演じ」、「馬の手綱は腰に巻いて、腰のひ ねり、鐙の足加減で、馬を前後左右に巧みに扱っ」(98 頁) たという。

明治44年刊『現代娯楽全集』の「曲芸【曲馬】」の項には、「馬 上の狂言は花やかな簡単なるものを撰び仮令ば一谷嫩軍記 の熊谷直実と無官太夫敦盛の組討の如き鎧物などもすれば 又川中島の信玄謙信の出合等も演ずるし或は石橋のごとき 所作事も演じ梯子乗もすれば碁盤乗もする」(416頁)と説 明されている。

『日出新聞』(現・京都新聞)明治25年6月5日(日曜日)付は、 「三府合併大曲馬」の見出しで、6月3日から、「江州彦根町 大字川原町長光寺に於て」「大曲馬」が「毎夜」「興行」さ れていることを伝えている。

こうした曲馬などの娯楽的な見世物が寺社の境内で催され ることは、当時よくあった。それには、寺社などの建物の 修復・修造のための募金活動、すなわち勧進のためという 名目があったからである。



『日出新聞』明治25年6月5日発行



大曲馬娘所作事 中村石井座のチラシ (明治 16年)。 出典:国立民族学博物館『[特別展] 見世物大博覧

16

15

### 挿絵・その他――― パーソンズ、職業・画家



A Garden of Roses, Watercolours by Alfred Parsons, RA, Commentary by Graham Stuart Thomas, OBA, Salem House Publishers, 1987. (個人蔵)

イギリスの著名な園芸家エレン・ウィルモット Ellen Willmott(1858-1934)の *The Genua Rosa*, 1910-1914(『バラ図譜』)のために、パーソンズは彼女の庭に咲いていた数多くのバラを描いている。バラ研究者 Graham Stuart Thomas がその中から 70 点を精選し、原画を忠実に再現した図版集として 1987 年に出版した。

パーソンズが描いたバラ図は、バラの種類でとに、花弁や雄蕊・雌蕊、葉の表と裏、茎にある棘などを、植物学的に細部に至るまで精確に描いている。しかも、図鑑にありがちな、過度に解剖学的になることがなく、実にナチュラルに美しく表現されていることから、バラ愛好家たちから高く評価されている。



A.B.Freeman-Mitford: The Bamboo Garden, London, Macmillan, 1896. (個人蔵)

本書は、禅宗庭園に深い関心を抱いていたミットフォードが、日本や中国、北米、ヒマラヤなどで見られる様々な種類の竹について研究した成果を纏めたもの。書中に収められた竹の絵をパーソンズが描いている。

フリーマン=ミットフォード(1837-1916)は、英国の外交官・政治家・著述家。イギリス公使館書記官として 1866 年から 1870 年まで日本に滞在し、明治維新前後における日本との外交交渉で重要な役割を果たした。日本に関する著作がいくつかあり、*Memories by Lord Redesdale*, London, Hutchinson & Co.,1915(長岡祥三訳『英国外交官の見た幕末維新』〔抄訳〕講談社学術文庫、1998 年)、*Tales of Old Japan*, London, Macmillan, 1871, *The Garter Mission to Japan*, London, Macmillan, 1906(長岡祥三訳『英国貴族の見た明治日本』〔抄訳〕新人物往来社、1986 年)などがよく知られている。

17



The Danube, From the Black Forest to the Black Sea, by F. D. Millet, Illustrated by the Author and Alfred Parsons, New York, Harper & Brothers, 1893. (滋賀大学附属図書館蔵)

1891年の晩夏、パーソンズは、友人のアメリカ人画家フランシス・ディビス・ミレット(1846-1912)と旅行家・著述家のポルトニー・ビゲロー (1855-1954)の3人で、ドイツ南部の「シュヴァルツヴァルト(黒い森)」から、ドナウ河が海に注ぎ込む「黒海」河口まで船で旅をしたが、そのときの紀行文。 この『ドナウ河紀行』を著したのはミレットであるが、挿絵は彼自身とパーソンズの二人が担当している。

中央の写真の3人の男性は、左にパイプを銜えながら座っているのがパーソンズ、真ん中に立っているのがビゲロー、右側に腰掛けているのがミレットである。 右の挿絵は、オーストリアのメルク修道院で、パーソンズが描いたもの。

18



アルフレッド・パーソンズの肖像写真(市田左右太撮影)のレプリカ (滋賀大学経済学部附属史料館蔵)

パーソンズが来日した明治 25 年に市田左右太 (1843-1896) によって撮影された写真。市田は明治時代に活躍した著名な写真師で、神戸の元町に洋館の写真館を構えていた。

これまでパーソンズについての文献資料等でこの写真が掲載されたことはないので、貴重な写真である。

この写真のオリジナルは、天寧寺でパーソンズが親交を結んだ高木喜三郎家が所有していたが、「水彩画家 アルフレッド パーソンの事」(1953 年)という論文を発表した元滋賀県立短期大学教授の故島戸繁氏が、高木氏の家族から許可を得て、高木家にあったパーソンズの肖像写真を撮影(複写)したと推察される。

このレプリカの写真は、島戸氏のご子息から本学経済学部附属史料館に寄贈されている。